作　　文



小学校　最優秀賞

「空飛ぶ救急車がつなぐ命」

朝陽小学校　六年　　髙橋　果歩　さん

「ピーポーピーポーピーポー……」

私は救急車のサイレンの音を聞くと、救急車の中や病院では患者さんを救うため、大勢の人が動いているのが想像できます。それと同時に、「患者さんが早く病院に着き、命が助かりますように。」と願います。あの音を聞くたびに、私も自分の手で人を助けられるような大人になりたいと思うようになりました。

私は将来、このような緊急患者さんを助ける救急医になりたいです。その中でも、フライトドクターを目指しています。フライトドクターとは、救急車より早く現場に到着できる「ドクターヘリ」というヘリコプターに乗る医師のことです。緊急患者さんを処置しながら病院まで運ぶことができるので、より多くの命を救うことができ、後遺症も残りにくくなります。私は救急医について調べていくうちに、フライトドクターのことを知り、私も将来フライトドクターになってたくさんの人の命を救いたいと思いました。

全国にドクターヘリは約 60 機配備されており、一都道府県当たりの平均配備機数は約 1.2 機です。ここ長野県では、ドクターヘリを 2 機配備しています。長野県は南北に土地が広く、大きい病院に行くためには山を越えなければならず、救急車では時間がかかってしまいます。しかし、ドクターヘリで空を飛ぶことで、移動時間を大幅に短縮することができます。長野県に住む人々にとって、ドクターヘリは命をつなぐために大切な空飛ぶ救急車なのです。

私はフライトドクターになるために、今から勉強や体力作りなどの努力をしていきたいと思います。そして、医療チームというのは患者さんの病態に合わせて、医師の他に、看護師や薬剤師、リハビリ職などの様々な医療専門職と協力して命を助けるため、チームワークも大切になります。

私は学校で保健委員会の委員長をしています。保健委員会では、トイレットペーパーや石けん補充をするなど、学校の衛生活動に力を入れています。また、児童会祭りの準備では、委員長、副委員長、書記の三役で協力し、文章や絵を休み時間を使って書き上げ、委員会の人には景品などを作ってもらいました。当日は保健委員会の出し物がとても人気で、たくさんの人に来てもらうことができました。今までは楽しむだけでしたが、委員長になったことで、チームワークの大切さやみんなをまとめる難しさ、企画する大変さを知ることができました。

このように、フライトドクターになるためには勉強だけでなく、チームワークも大切だということを学校生活で身をもって実感することができました。だからこそ、私はけがや病気で不安な患者さんの気持ちに気づき，寄りそえる医師を目指します。



中学校　最優秀賞

「笑顔のたね」

更北中学校　一年　桐澤　里奈 さん

私には、忘れられない記憶があります。

私が三、四歳のころでしょうか。父と出かけた先で、迷子になってしまいました。私は、怖くなって、店内を探しまわりましたが、見つかりませんでした。

そのため私は、「父は自分を置いて帰ってしまったのではないか。」と思い、幼心ながら恐怖を感じました。慌てて駐車場に出てみても父は見つからず、私はとうとう、そこに座り込んで泣いてしまいました。

そのとき、しゃがんで私と目線を合わせ、「大丈夫？」と聞いてくれる人がやって来ました。お兄さんとお姉さんでした。見た目がチャラくて、最初は怖かったのですが、お姉さんが目線を合わせてくれたおかげで、恐怖が和らぎました。事情を話してみたところ、お兄さんとお姉さんはすぐに、「一緒に探そうか。」と笑顔で言ってくれました。

その後、お姉さんは私を抱き上げて、もう一度店内を探してくれました。お兄さんは、レジにいた店員さんに色々と聞いてくれました。

そのおかげで、すぐに父を見つけることができました。

私は、この二人の顔を今でも鮮明に覚えています。幼い私にとっては、「目線をあわせる」ということさえ嬉しく感じたのだとわかり、どんなに小さな親切でも、誰かにとっては大きな親切になるのだと強く感じました。

私はこの経験を通して学んだことがあります。それは、「人は見た目ではない」ということです。お兄さんとお姉さんに、最初に抱いたイメージは「チャラくて怖い」でした。それでも、助けてもらった後には「優しくて素敵な人たち」と

いうイメージに変わっていました。たとえどんなに怖くても、「怖い人」と決めつけず、「どんな人だろう？」と考えてみてもいいのではないかと思います。

この二人にはもう会えないと思うので、感謝を伝えるのは難しいと思います。なので、せめてこの感謝の気持ちと出来事を覚えていたいです。

この経験は、私を大きく変えるきっかけになりました。昔の私は、それこそ自分のことだけで精一杯だったので、困っている人を見ても見て見ぬふりをする、ということの方が多かったのです。それでも、この経験で、自分に手を差し出してくれる人がいるということに感激し、「変わろう。」と思えたのです。

その日から私は、困っている人にはすぐ声をかけられるようになりました。それは、小学校、中学校へ上がっても変わりません。

ですが、その「困っていたらすぐ声をかける」という行動が失敗を起こすこともありました。困っても自分でどうにかしたい人がいることを理解せず、相手が考えている状態で声をかけると、自分も相手も傷つくことが、今では良くわかります。それが分かると、私は、困っているがどうしようとしているのかを見るようになりました。「自分で方法を探している？それとも助けを求めている？」と考えられるようになると、おたがい傷つくトラブルより、感謝されることの方が多くなりました。

「私もあのお兄さんとお姉さんみたいに、人を助けたい！」、そんな一心で親切を心がけてきました。でも今は、親切にしたい理由は他にあります。私は、人の笑顔を作りたいのだと気付いたのです。あの日声をかけてもらって、最後に私は笑顔になれました。私が親切にした人も同じです。いつも、笑顔で「ありがとう」と言われる。親切は、幸せの花を咲かせるのだと思います。

私にとって親切とは、笑顔という名の幸せのたねだと思います。

では、あなたにとって親切とはどんなものですか？その答えはきっと、あなたの心の中にあるはずです。